

# 最先端科学に要する能力

こたに もとこ  
小谷 元子

総合科学技術会議は、多様で優れた研究者の活躍促進の必要を説き、特に女性研究者の研究と出産・育児等の両立支援の実施を求めている。また、現在の博士課程（後期）における女性割合を参考に、自然科学系全体で25%を女性研究者の採用目標としてあげている。現状では研究者に占める女性割合が11.6%で、OECD国の中ではダントツに低いことを見ると、なかなか厳しい達成目標である。

実生活に必要な読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの能力に関して、15歳児を対象としたPISA調査がある。大沢真理東京大学教授（第4回東北大学男女共同参画シンポジウムの基調講演）も述べられたことだが、2003年PISA調査に見る15歳児における数学的リテラシーはOECD国では男子が女子より高い得点（+11、有意）をあげる中、日本では、男子のほうが少し高い（+8）ものの、統計的には有意の差はない。ちなみに読解力は女子が有意に高い（OECD +34、日本 +22、OECD国の平均値：500点、標準偏差：100点）。

一方、日本の大学で、女子学生が理系に占める割合は理学25.5%、工学10.5%、農学40.5%、医科・歯科33.9%と明らかに男女差が表れている（平成17年度学校基本調査）。15歳での数学の能力は国際的にも男女差が少ないにもかかわらず、3年後に大学の進路を選択する際には、他国以上に大きな男女差が表れることには驚く。

実際に最先端の科学の研究で要求される能力は、単に一つの能力に突出しているというような単純なことではない。さまざまな能力が、絶妙のバランスをとって、個性的・独創的な研究を支えている。数学は「論理」の学問と思われがちであるが、それでも「ひととなり」「価値観」が如実に現れる。そのような現状を実感していると、男性と女性などというおおまかな括りで、「女性は科学に向いていない」などという発言は、全くのところ不思議に感じられる。